

一宮町長
馬淵 昌也

9月21日から、石川県へ消防団第四支団の皆さまと一緒に、視察研修に出かけました。大変学ぶところの多い研修でした。

まず、小松市の防災センターを訪ねました。小松市は、梯川かたしがわという一級河川の下流に位置し、市の中心部分はすべて浸水の危険ありというところで、令和4年にも大規模な浸水が起こったそうです。市の消防本部に併設された防災センターは、25年前に建てられたもので、大地震発生を想定した動画の映写コーナーをはじめ、大変力の入った体験施設でした。千葉県では、あまり類例を見ないのですが、防災教育には大いに有効だと感じました。

次に、輪島消防署に伺い、昨年の能登半島地震と輪島市大規模火災、そして9月の奥能登豪雨時の状況について説明を伺い、現場踏査を行いました。地震では、多くの建物が耐震性不足により倒壊したそうで、一宮町の耐震化率は高いが、更に上げる努力をせよ、とのことでした。また、消防署にも380人もの避難者があり、予想外のことで対応に苦労したと仰っておられました。

消防団の方々の研修ということで、輪島市中心部の朝市エリアで起こった

大規模火災の消火活動について、特に詳しく説明をいただきました。当日、消防署員と消防団員の方々はいずれもポンプ車をできるかぎり動員して作業に当たったそうですが、①消火栓が断水で使えなかったこと、②エリア横を流れる川が、地震で上流がせき止められて水が激減しており取水が難しかったこと、③大津波警報が出ており、海に近づくことができなかったこと、などにより困難を極めたそうです。しかし、状況を見極め、次々に対応を変えながら消火を行い、次の日に、ようやく延焼の阻止までたどり着いたということでした。延焼阻止の最終ポイントの現場を拝見しましたが、よく食い止めたな、と驚くような状態でした。食い止め後は数日に渡って、消防団員の方々が最終消火を行ったそうです。

また、奥能登豪雨では、能登半島地震により設置された仮設住宅が大人の首の高さ辺りまで浸水したことや、14歳の女子中学生が家ごと流されて亡くなり、必死の捜索が行われたことも伺いました。極限状況の中での、消防署員・消防団員の方々の英雄的な行動に、深い敬意と感謝の念を抱いた意義深い研修となりました。